

2007.01.16：防災・危機対策調査特別委員会

「災害時における要援護者支援について」

池田友信委員

今までのお話の中でいろいろ総合しますと、災害対策ということについて、やはり地域が重要だということは、これはだれしも皆さん知っていると思いますしそういう状況なんです、では地域の状況を見た場合どうなのかと。実は、我々特別委員会としては、全市的なことを考えた場合に、何が欠けて何をどうしなくてはいけないのかということを経験をされているきょうのパネラーの方にいろいろお聞きしながら、メスを入れるところをひとつ我々として模索して、議会でまとめて提言するというふうにしたいと思っておりますが、地域の状況というのは正直言って、私も町内会長をしておりますけれども、会長の認識、危機意識、問題意識、これの状況によって格差があると私は思うんですね。このままでいいのかという、私はある意味では危機意識を持っています。高橋さんのお話を聞きまして、会長さんとして大変問題意識を持って、現場に行かれて、現場の中から新しい問題意識を持って、地域の中に行って、それに対する準備をされたりあるいは説明をされたり、そういう形の活動をされているということを知っていて、非常に私は敬服をしておりますが、やはりそういう中でやられている会長さんと、全く会報と行政から出てくる市政だよりを配布して、大体総会をやって終わりというふうな形の状況と、全く組織もないところと、こんな状況のばらつきでいいのかということを経験をされている方から、この災害対策の中では、町内会活動の意識の問題、問題意識、そういうことをいかにしてレベルを上げるかということが、では仙台でどんな形でそれをやっているかということ、正直言って私は地域の町内意識、自治組織、自主防、大切ですから皆さんやってください、頑張ってくださいだけで終わっているんですね。これで本当に災害対策という形で、全市の行政も含めた全知全能で対応しているかということ、私はそれだけではだめだと思うんです。したがって、高橋さんの方からぜひ聞きたいのは、回りの町内でもそういう形の格差がある中で、どんな形をしたらそういう意識に上がっていくのか。どういう活動をしたら、行政でどういうことを取り組んだらそれを上げるのかということの、何か行政に対して言いたいことがあったら、ぜひ聞かせていただきたい。

私はほかの、例えば神戸の災害に行きました。災害の後、この体験をむだにするわけにいかないということで、防災センターを建てて、そして神戸のときと同じような体験をするような耐震構造と映像とですね。そんな形でいけば、当時の状況ががんと体で感じて、これはやらなければならないという形で研修をさせて、町内の会の役員の人たちが輪番制で来ている防災センターがあ

るんですね。ああいうものは仙台にはないので、私はぜひそれをしないと、町内のレベルを上げると言たって、それにかわるものが何か地域で、行政側で持っていれば、私はこれからどんどん高橋さんみたいな形で、一生懸命地域に説得して、メンバーをふやしていくと。こういう形になるんですけれども、現状そういう意味で高橋さんの経験から見て、仙台市にこういうことをしないと地域はその気にならないのではないのという意識が、あるいは問題提起がありましたらぜひお聞かせいただきたいと思います。

災害時に、少なくともきょう来られたパネラーの皆さんのそれぞれの役割が町内にいくわけですね。ボランティアが来て、受ける体制、意識がなければ、ボランティアが来てても邪魔ですみたいな感じになるわけです。ですから、そういう意識にするためにも、行政に今こういうことをしないといけないのではないですかという高橋さんの御意見を聞きたい。よろしくお願いします。

高橋みさを参考人

実際淡路島に行ったときにも、お年寄りなんか、うちがどんとつぶれたとき、やはり4人に1人は隣近所の人に助け出されたというのを聞いてきて、やはり隣近所、小人数の助け合いが大事だなと、そのときから私一生懸命になってやってきたんですけれども、やはり阿部さんもおっしゃったように、地域でみんな隣近所と、民生委員がいたって、私は何もできませんでしたと言われました。三宮とか長田町とか。私は何もできませんでしたと。第一うちがつぶれて、隣近所もつぶれて、もう何も動けなかったって。自分のうちもつぶれて食器から何から全部、足もぎっくり切って動けなかったというんですね。それで私きょう皆さんに手袋を持ってきたのは、親兄弟といえども素手では血液は触ってはだめということで、常にこれ玄関に下げておいてちょうだいということなんです。C型肝炎なんか移ったら、4人に1人肝臓がんで死んでしまうからね。これは必ず持つて歩くことということで。あとおトイレなんかも持つて、行政では何か避難所におトイレ二つずつ用意したというけれども、実際目の不自由な人、それから足の不自由な人、行政で用意したおトイレは使えないとみんなに言われました。だからそういうものよりも、うちの方では少年消防クラブ30人おりまして、実際公園の片隅に穴を掘って板を渡して、さおを立てて、ブルーシートでぐるっと渦巻きをつくっておトイレつくったら、車いすも入れるし、そういうものいいねと言われたんです。実際やってみたら、なるほどなと思ったんですね。足の不自由な人もいいし、車いすでも入れるし。だから、避難所におトイレ行政で二つ用意したとかといっても、使えないとみんなに言われました。だから、やはり自分が目が不自由、足が不自由、体が不自由という、自分の身になってみて用意してもらいたいんです、行政に一言、言いたい

のは。

それからやはり、先ほどから皆さんおっしゃったように、うちの方では救助リーダーというのを立てましたけれども、毎年かわる班長さん77人毎年かわりますから、その人も補佐として、あと消防団もおりますけれども、いざとなったら消防署員とか消防団員は、もう皆当てにならないから、私たちうちにいるものとか必死になってみんなで隣近所を助けるということ。だから、隣近所みんなけんかしないで悪口言わないで、みんなで仲良くしましょうねということで、今わっしょいわっしょいとやっていますけれども。

それから格差があるんです、やはり。連合会長さんに言って、各消防署にアドバイザーさんがおります。南小泉北部連合ではこの間もアドバイザーさん、若林消防署で4人おりますので、渋谷さんというアドバイザーさん呼んで、連合会で講演してもらったんです。私と2人でいろいろ交互に。それがわかりやすくともよかったというので、いろいろ消防署におりますので、アドバイザーさん呼んで、お話をいただいたら、とってもわかりやすく有意義だということをご皆さんわかっていただきたいと思います。

池田友信委員

今回のテーマであります災害時の要援護者をどのように対応するかと。こういう形の中で絞っていきますと、先ほどるる参考人からも意見があったように、やはり地域の自主防体制含めて町内のそういう体制をどういうふうにつくるかと、充実させるかということが大きなかぎだと思うんですが、災害として対応する消防局、あるいは地域町内をどのような形で活性化するかということをお考えますと、企画市民局と各区、この辺の中でいろいろ論議されていることに対する仙台市としてどのような形、要援護者も含めて地域町内で取り組んでいくか。どういうふうに取り組んでいくかということの指針なり方針を掲げて、地域町内のためのいろんな行政対策をこれからぜひ出していただきたいというのがまず一つです。

二つ目に、要援護者の中で、今回の中でちょっと出たのは、薬の問題がちょっと出ましたね。それは確かに要援護者から見ると、話して説明できる人ばかりではなくて、話もできないでおられる方、その辺に対する薬をどういうふうに対応するかというと、先ほど言った処方せんを持っているといいと。こういうことで高橋さんから話がありましたように、処方せんは薬が出るときに出ますからそれを持っていればいいんですが、本来はそういう方々にどのように治療してきたのか。どうこれからやっていくのかという医師の判断。それも本当は携えなくてははいけないんですね。先進国ですと、それぞれの人が旅行に行ってもどこで倒れても、ちゃんと自分がこういう薬を飲んでこういう治療をしてき

ましたよということがわかる自分のカルテを持って旅行に行くとか、携帯して
くるとか、そういうふうな状況の国があります。仙台はまだそういう形になっ
ていないと思いますが、問題はそのカルテを開示すると。カルテ開示しないと
そういうカードができないですよ。だから、問題は医師会の方にこれから仙
台市の方としても、そういう災害対策のことも考えますと、要援護者に対して
は、普通我々も医者にかかれれば本当はどんな薬をやって、どういうふうに治療
したかというのを本当は開示する、してほしい。権利が本当は患者としてある
んですから。お金を払っているんですから。しかしなかなかそれはしないとい
うのが現状だと思うんですが、少なくとも市立病院あたりは要援護者に対する
必要な時期は、ちゃんとカルテも開示できるような携帯用の、そういったこと
も本当は考えていかないと薬の問題。なかなかそれは現実には、災害のときに
どんな薬をどういうふうにしたか。間違っって投与されて、かえってそれで被害
が起きるなんていう場合もないわけではありませんから、だからきょうの中で
私としては、薬の問題を含めてぜひ間違いなく処方してもらえような、そう
いったカルテの開示と、そういう携帯のもの。なかなか医師会の人たちが踏み
切れない。自信を持ってカルテをきちっと、どこでも見せられるような感じで
やってもらうと本当はいいんですけれどもね。まず、専門家の人もいますけれ
ども。そういうこともぜひ市立病院としても検討していただきたいということ
を、こちらの方から話をして、消防の方専門家でないからわからないでしょう
けれども、一応そういう意見もあったということでひとつ出していただけると。